



知的に美しく小児科医を育てる本

評者 崎山 弘 崎山小児科院長

小児科外来を訪れる患者の多くは「自然治癒」します。おおむね間違いではない診断をつけて投薬をしながら経過を診れば、医療によって症状が多少早く落ち着くかもしれませんが、多くの場合で治癒に至る道筋をつけたというほどの貢献はしていません。しかし、本書に出てくる疾患は、直ちに確定診断することは難しくても、診断が曖昧なままに診療を終わらせてはいけない（帰してはいけない）ものばかりです。病気の診断、特に重篤な疾病の診断を、一瞬にして成し遂げられる人はそうはいません。「何かおかしい」「どこか説明がつかない」など紆余曲折しながら診断に至ることが大部分です。

前作『帰してはいけない小児外来患者』（2015）では、主訴と所見をどのように結びつけるか、単なるひらめきに終わらせることなく、診断に至る思考の組み立て方を中心に、症例の診断経過が記載されていました。第2弾となる本書では、この症状では具体的にどのような点に注意するべきか、が丁寧に解説されています。「診断の筋はよかったけれど、最後の決め手に欠けた…」という苦い経験に至ることを防ぐ判断力が養われます。

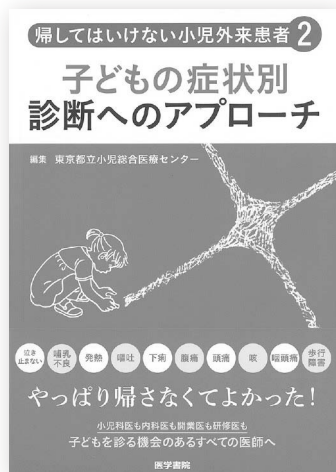
本書と類似の書籍との違いとして特筆すべきは、以下の3点です。

まず、東京都立小児総合医療センターならではの豊富な症例と専門家集団の適切な診断に基づいた貴重な教訓、多くの示唆が得られることです。症例のカラー写真・X線写真・超音波画像など、教科書に掲載されてもおかしくない典型的な資料が示されています。多施設から症例を寄せ集める形式での分担執筆の書籍は、個々の著者の癖が出るために読みにくいことがありますが、本書は外来受診から診断までが一連の流れとなつて1つの医療機関で完結するために統一感があって読みやすくなっています。

2つ目は、育成する教育という視点が明確になっていることです。「泣きやまない」「嘔吐」「皮疹」など17種類の症状について、概略を記載したあとにいくつかの症例を示すという流れのなかで、総論→各論と実践形式で読み進めることができます。重篤な疾患は、診断にあたり同じ間違いを二度としないと肝に銘じて、同じ疾患に遭遇することがほとんどないような稀な疾患ばかりです。他人の誤診を指摘してこれを正す教育は、診断要素の一部分を強調するだけで、丁寧に育成する教育とはなりません。初めて経験する稀で重篤な疾患を適切に診断する能力をつけるためには、最適の書です。

そして3つ目は、書籍ならではの力です。インターネットで検索すれば疾病の知識を情報として取り出すことは可能です。しかし、見開きのページに効果的に図や表が配置されていて視認性がよいので、紙面上の配置とともに文字の情報が頭に素直に入ってきて、理解を助けてくれます。この編集の美しさという感覚は、パソコンなどの画面では得られません。

小児科医を育てるという観点からは前作よりはるかに優れており、子どもの診療に携わる医師にぜひお勧めしたい1冊です。



帰してはいけない小児外来患者 2 子どもの症状別 診断へのアプローチ

東京都立小児総合医療センター＝編
本田雅敬、三浦大、長谷川行洋、
幡谷浩史、萩原佑亮＝編集代表

定価：本体 3,800 円＋税
A5・272 頁／医学書院／2018
[ISBN978-4-260-03592-7]